

生駒翠山の絵葉書
(京田辺市所蔵)

生駒翠山絵葉書のリスト
(京田辺市所蔵)

番号	年月日	内容
1	S2.11.12	画房の屋根と山
2	S2.11.16	蜂の巣
3	S2.11.20	コクマカキ(枯れ枝拾い)
4	S2.12.3	ざくろ
5	S2.12.15	唐がらし
6	S2.12.19	松
7	S2.12.23	牛蒡
8	S3.1.5	画房の北面
9	S3.1.11	画房の南方
10	S3.1.15	娘(妙子)
11	S3.1.20	翠山宅西方
12	S3.1.30	頬白鳥の巣
13	S3.2.11	娘と団子山
14	S3.2.13	クマン蜂の巣
15	S3.2.29	梅
16	S3.3.3	翠山宅
17	S3.3.4	翠山宅
18	S3.3.10	竹と梅
19	S3.3.19	採蘭
20	S3.3.29	つくし
21	S3.4.3	たんぽぽ
22	S3.4.5	杏
23	S3.4.10	文章のみ(引越通知)
24	S3.4.15	翠山宅前の山
25	S3.4.25	小魚
26	S3.4.25	雀の子
27	S3.5.6	自宅への案内図
28	S3.5.19	たんぽぽ
29	S3.5.29	夏蜜柑の花
30	S3.6.5	翠山と娘
31	S3.6.9	文章のみ(螢火の野道)
32	S3.6.15	田植え
33	S3.6.21	朝顔
34	S3.6.22	翠山宅前の田
35	S3.7.2	モツ
36	S3.7.8	ドグロ
37	S3.7.13	田甫の情景
38	S3.7.21	小鳥
39	S3.7.31	西瓜畑
40	S3.8.15	お盆(坊さん行脚)
41	S3.8.24	野萩
42	S3.8.27	アケビとバッタ
43	S3.9.10	トマト
44	S3.9.17	頬白鳥
45	S3.9.21	親子(抽象画)
46	S3.9.28	落栗
47	S3.10.5	虹
48	S3.10.10	きんもくせいと雲雀
49	S3.10.20	ざくろ
50	S3.10.31	山茶花
51	S3.11.6	夜警
52	S3.11.9	龍膽
53	S3.11.14	田舎の奉祝の賑わひぶり

54	S3.11.21	山柿のつるし干し
55	S3.11.27	奉祝の提灯行列
56	S3.12.12	獅子
57	S3.12.17	冬の田
58	S3.12.25	娘のオカゲオドリ
59	S4.1.15	トンド
60	S4.2.1	翠山宅の東縁
61	S4.2.23	ゲンゲ(レンゲ)
62	S4.2.24	河豚
63	S4.2.29	山と里
64	S4.3.11	藪椿
65	S4.3.21	梅
66	S4.4.29	ツツジか
67	S4.5.23	きんぼしげ
68	S4.5.29	茶摘みの帰り
69	S4.6.12	水田など
70	S4.6.18	麦刈り入れ前
71	S4.6.23	牛での耕作
72	S4.6.28	茅葺の家
73	S4.7.11	娘と鴉
74	S4.7.19	巴旦杏(すもも)
75	S4.7.30	奈良公園の鹿
76	S4.8.13	目白
77	S4.8.29	馬追虫(キリギリス)と蚊帳
78	S4.9.6	川沿いを歩く姿
79	S4.9.15	翠山の菜園
80	S4.10.2	猿取茨
81	S4.10.5	落山栗
82	S4.10.23	多々羅集落入り口
83	S4.11.15	門前の細道
84	S4.11.25	稲掛け
85	S4.12.17	四十雀
86	S4.12.26	川での大根洗い
87	S4.12.30	枝に積もる初雪
88	S5.1.1	午年の年賀状
89	S5.1.2	晴着姿の娘
90	S5.2.15	梅
91	S5.2.25	山麓と蝶
92	S5.3.6	つくし
93	S5.3.17	老人による籠の手入れ
94	S5.3.31	竹林
95	S5.4.3	井出の山吹山
96	S5.4.24	山と里
97	S5.5.8	茶摘み遠景

NO.1~10

郵便はがき



京都市下京区

油小路北七路

齊藤達介先生

信下 磯元 新 郡

三ノ本村

三十三ヤマ
字 平山

山へ行くついでに、
を廻して、ついでに、
漢大の、
海舟の、

山の、
ま、
先生を、

これを、
の、

二軒を、
まり、

の、
の、

二軒を、
まり、

の、
の、

の、
の、

の、
の、

十一月十日

三ノ山



郵便便



高都市下京道
油七段少路角

高田 連介先生

京三山本利子

高田山本利子

木のてらに巣をつくる
 おんがしり来ぬぬ
 蜂の巣にまゝ
 蜂とまゝ
 まあめりり



蜂の巣とて
 動物のつくり

三月十六日
 三山不石宗南山



きかは便郵



京都布下京邑
油小路北小路角

齋藤圭介先生

三山本村字南山

三山

木柵しか木柵をしいた。
 掃一とふも子孫の故り
 おとしまいた
 柵も下敷が黄ばんで
 まあまいた。
 下の屋敷のうすか水柵
 をおぼろりにもあま
 この辺いばこのうす
 コマをかくと云々
 風が吹く日は賣る道
 山のコラマがやが
 赤野も出しちがら
 八のう下と直り
 川生
 つ心
 も平
 和ん
 リ



郵便便所



京都下京区油
小路北小路角
齋友在分生

三山本
町
おら子

ゆいばいり

高りりし

一は二霜とま

リたお山

つみ洞

しりした

竹菰

りか狸

目立ち

帝名

したぬ



ガキ

出

え

の

は

は

は

は

は

は

は



郵便はか

京都市下京区
油小路少路

齋藤 甚介

角

先生

京都府

又かあるに信々たる
リからに予りりた
年未の風山の甲へ
も吹そあるの方
もせか車ていよを
良のものがあつた
いれちのわげをす
念内り少いし高ふ
おもこわりてん
二重 亭 辰
通し見ずにし
まのりしむ

辛きふ

唐がらし

ちがひ

もろき



三月十日

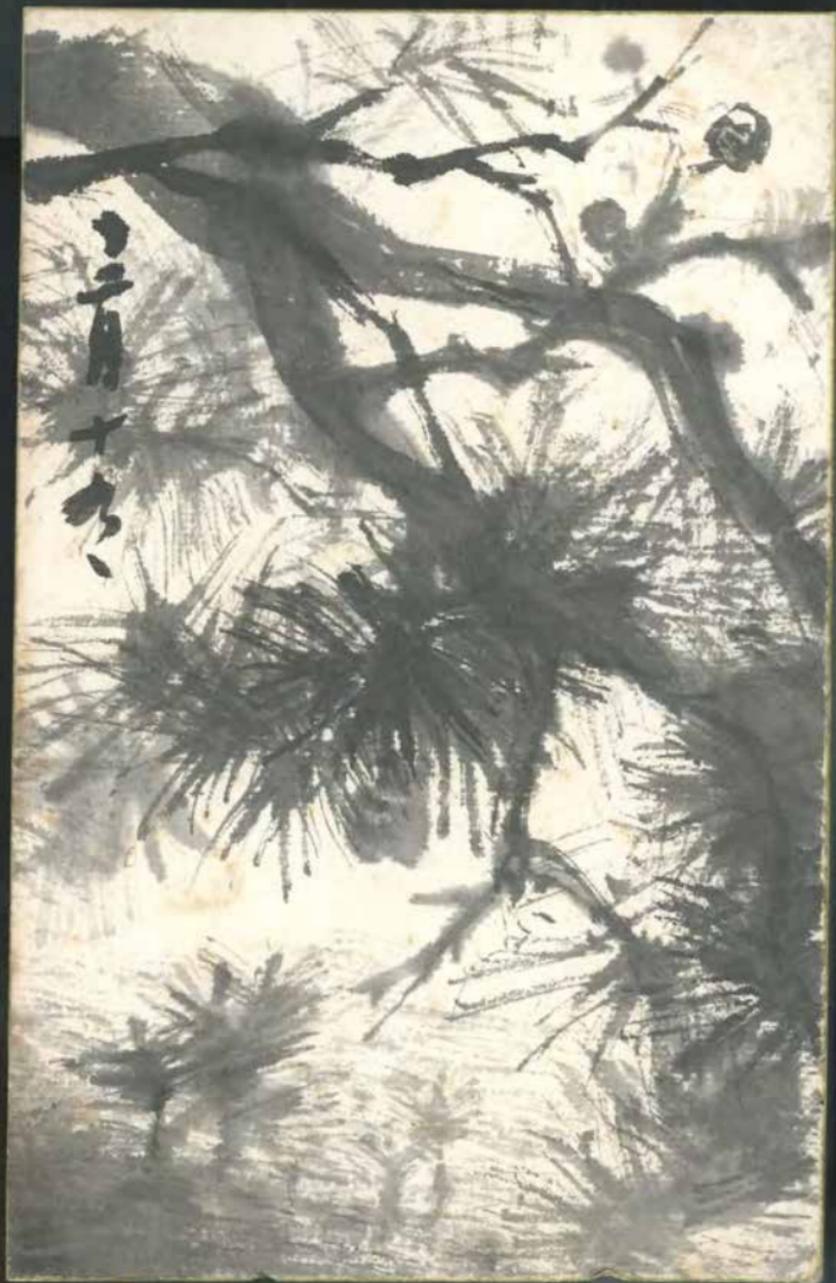


きかは便郵

高野市油
芥子油

高野市油
芥子油

高野市油の表紙
まいた色彩
すつた波心
やまの気村
花侍てま
ホッ、概念描字
のど断れて自
のものを削りた
のと思つて
がどいふタリ
がよいのか表し
が大いに
ひま



郵便はき



高部市油ヶ池
少女隊 申

ニありぬまきり
先生

色々の書き送るに
はあしきなり

山の中ははるの
あしきなはで一村
かたしきつらみ
みつ子がきり

眼の方付るを
もろし かつまつた

かたはらぬし
ありりす 一度反作
家も御いん長

都長

大川に生る

ちゅう中 其方

やしの送しとて山の

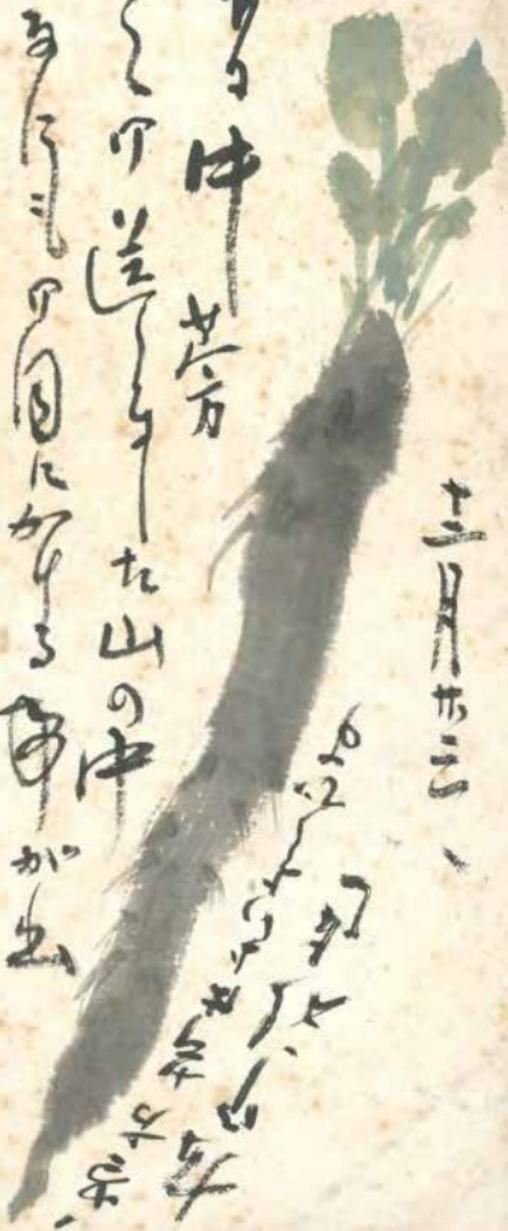
びまのしこの目にやると

すまのまのふの百様にいはせ

ひも一のうらまひすがいくら

中ヤ芳のあひひや

ひまのあひひや



大川に生る

郵便はかき



高野市下上原色
津山鉄山跡角

高野市下上原色
津山鉄山跡角

うつまり家しくまり
したを 家をかりを
のせを 性をうて
山を 海をいじん 履
四つより 便りを少し
つぎやうしと思ひます
岡市 左が 田舎です
ハ 延り 玉水より 来る道
西の 山上の なる道 が
モーツ あり ます
の 先を 付つり ころ 江
新 市 郵便の 便りを
付つり 山 上りの 道
付つり 山 上りの 道
一月五日 田舎人 見る
人の 姿を 見た
村の 安に 晴しい 日です



永梅林

畫房
北面



郵便はか

京都市油小路
北小路角

齋藤圭介

先生

当分 翠平山小屋と五小
屋とを中心にして居りわ
りをすつかり 作覧に本
てしまふと思ひます
で画意は二義として出ま
るだけ如実に写して作
覧に供したいと思ひます
然しこんなざりたものに
なりまゝ
此は先信の半径の正
線です 翠小屋の向ふ
の家です 翠山小屋は
この家の手前 右へ昇つた
處にありませう 因中ニ尾
の猫は此處にまゐりませう
です 山のもの 殊に生物は
非常に奇麗なす



壺屋より南里の庭



郵便はかき

角

京都市下京区
油小路
北小路

齋藤圭介

先生

大に計るは
 山に大に
 見入る可
 一
 昔

といつて
 せん
 成長し
 ました



妙に
 毎山入言
 松葉をかき

果めて
 買へ

紺の
 買へ

師
 師

えん
 師
 師

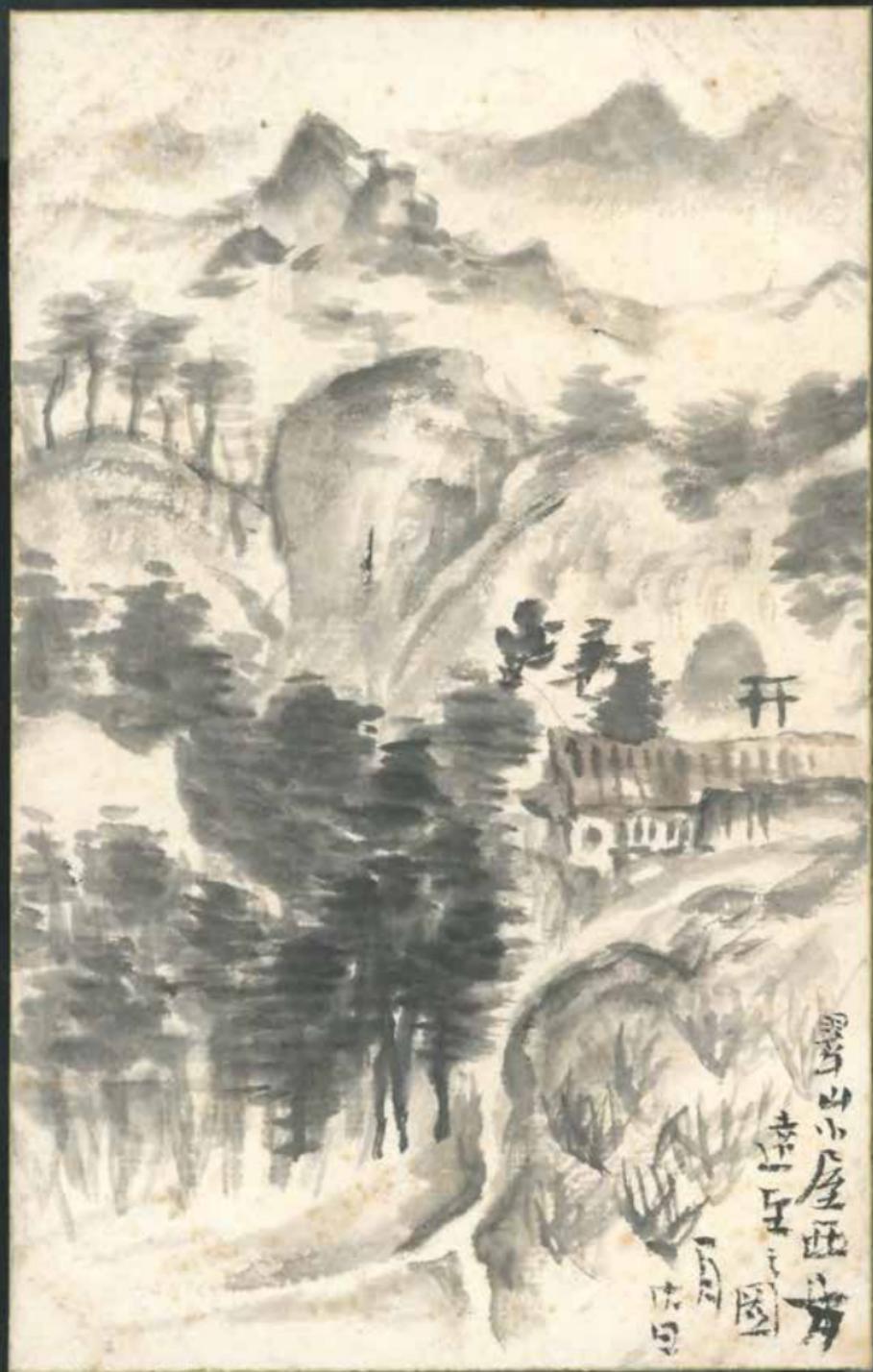
NO.11~20



郵便便

白川郡市下高野区油小路
北小路角

高野区五ヶ所
足生



开

翠山小屋西角
遠近之圖

庚子年

郵便はか



魚市

油少紙北巾紙角

高し飯直介

芝生

一歩或る石の頬白たるの祟果と見
 射りた地上ニミ尺の小松の枝
 春日なが祟果立ちとする迄の
 祟果下すから夏日蛇の祟果を
 考へてよらいものと見へます
 然し此の祟果のジヤンバルバン
 百舌子の空口はどうも人び
 してか小者の世界で
 ありますが野心死ではあり
 ませんか
 永くらの山に頼白たるに雲
 雀に雀のひなが望るこみ
 あるそとです
 それ等と生佐と隣りする事
 が出来る孝へたなりでも清
 々するではありませんか

壺物
モツと板が飯
つて見難くな
つてついで
外側は松の枝
や内側
は細かくわ
らかい糸の
よしたの草を
集めてあり
ます





五
方南
園子山
二月十日

きかは便郵



京都府下京区
油小路北十丁目

高橋在介

先生

人々の歌程の
 蛸の巢木が
 松の木のぶら
 下つていま
 した
 土地の人は
 中蛸の
 巢木を
 とひひ
 ます
 つまり
 クマン蜂
 と名付
 の蛸の
 中の蛸
 の名を
 さん



二月十三日
 中蛸の巢

じいちゃんか
 山田は山見
 のめく二重
 口たつていま
 あり、お面
 松の皮と少し
 の煮りた
 蟻で造ら
 んます、宣
 のものす

郵便はかき



京都市下京包
油小路茶屋角

高橋重介
先生

本田先生の例の金三屏
凡令終了いたし
金屏一雙相金位
十ヶ月賦で厚き毛
五人位描かして小ると
生徒のあり当方充分
勉強致すこと思ひ
勝手な事なご思ひ
少席の節りゆ注し
夏より日大伸化す
たふしんはたまに
あいな事な小 早
ニ丑位が、ト
宣ひゆるり
なると思ひ

小室より一里
下近一里出立
寺田より一里
とあるなり

朽つてものなりは
朽たぬ者なりが
神に近いと申し小
此息味におて
神に最も近い十五
勉強のあつたは聊か
悩ます小

二月廿九日

東風利か空を去る南山街
一輪虎咲き増し小 一度四斗山

三月下旬 頂里に下り
出立の 小は尚早
製作をつりたくと折列小



郵便はかき



京都市下京区
油小路北口角

高橋連介

先生

全庭植花
満開香気馥郁

嬉少者

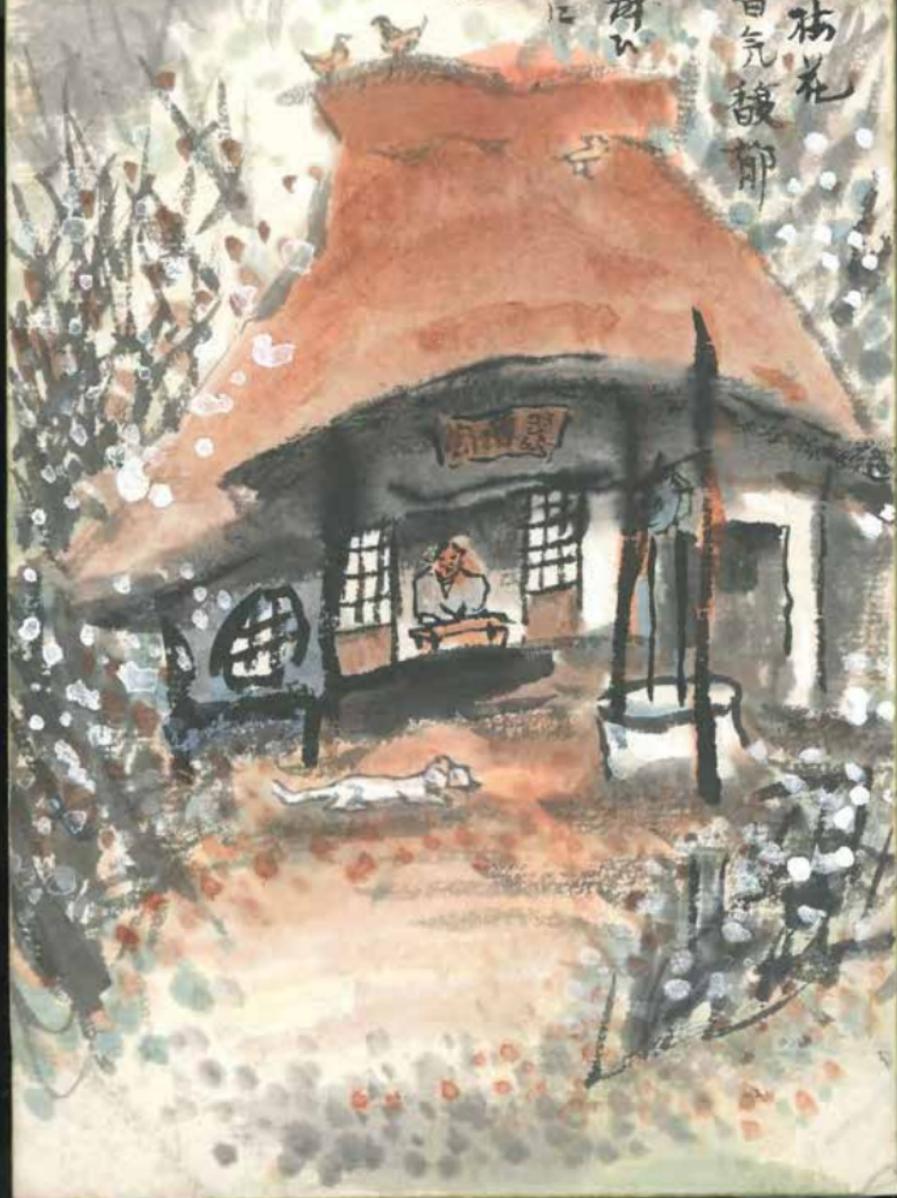
登上り舞い

翠山内に

醉子の
憂

三月

三日





きかは便郵



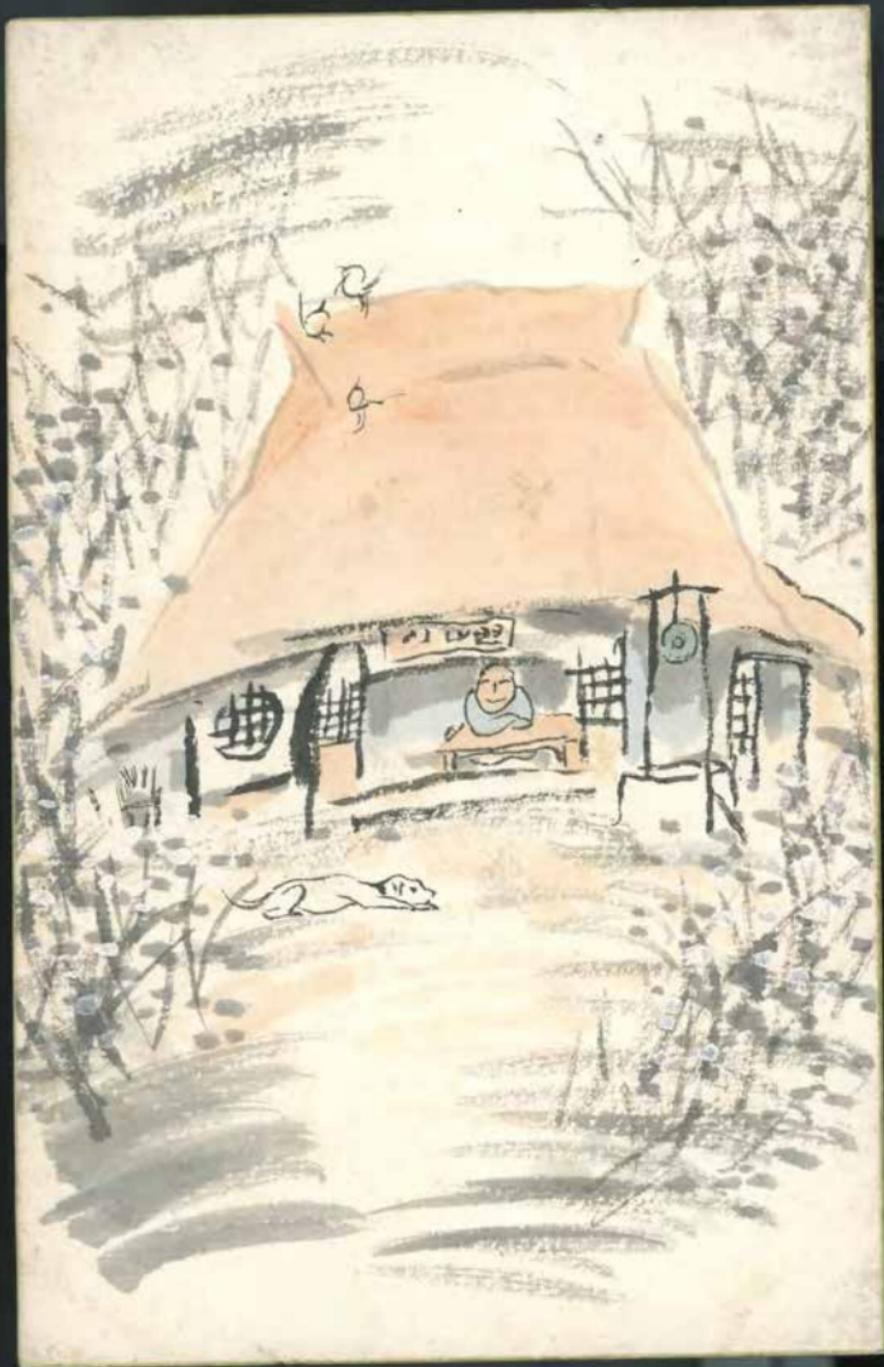
京都府京都市
油小路九丁目

九丁目

文庫

昨日は候翠山梅
嶺之園夕景即
興に乗って楠系木
したもののわいさ清代
さふこつが彼を極上
るものと思ひやす
こころにたるとか
行はしやす

三月四日



きかは便郵



京都市下安色
油小路心少次郎

高橋本介

先生

少年紙再交の存三配
並謝しとす 五日お
りよりたたら 里に下り
今一年閑居を研定元
と續けし事一に
亦成事甚たれ 少序
中流を以て不度敷力
四月上旬より 里に下り
心算亦 丁度菜の
養も以て頃思ひ水
原一度おのり引り
里に出入せめて 月一度
位は 丁度 仰ぎ度毛
のり水

三月
十日朝

今朝もきこへ

朝昔あり

子思



郵便はかき



京都市下京区
油小路北口角

齋藤圭久

先生

此後何時に末明に
送りますか久しい
るの金着看候を
下したはびす

妙子半信子オッカリ
山道に成りし事始
くはあり
お節さんはおまえのた
とて飯事す
山之口からんや春若
の花に
翌朝前座の末右衛
にナルはかちり澤山
のサ間がかりあり
即ち此合のモウ五六
と株リ録に利して
眺めてしまふ
松上り小多は一筆啓
上化川との類目



尋山早潮採蘭

之圖

きかは便郵



真都市下直る
油路北角

齋藤圭介
先生

雲雀 高くあがる

生のふくらみ



三月廿九日

懶
羽牛山

NO.21~30

郵便はかき



京都市下白丁
油小路北小路角

高橋圭介
先生

今日ハ四月の雛、節句
出では春の祭リで
田舎らしい馬馳まを
持つて子供が山へ集
つてきます

午後うら生憎の雨
包を擔ぎ山の子等
が山の腹をまわつて
帰ります

昨日今日摘草つるの
垣外にくる



四月三日
瀬尾山





郵便便

魚都市下直己
油少路本不路角

新河川保圭介

失生

山に咲くもの皆梅と云ふと思つてツマ

したが半以上巴旦杏のやま木

樹のめくつて花は白梅に似て、
ちよとす 花柄のし長く

梅のめくつて

来り十日には

山を下り心積

りに水準備

つたてをり

里は人ノ菜

の茶と蝶と雲雀

のせりりにも片付ヨル

へは一度出京行面

より度よりと云ル

花が重なり

咲つてつまず

面白く

庭木さといに絶々のものと

木振非常に

新ハル

四月五日



郵便はかき



京都府下京区
神田門外小路角
藤原村連介
子

古田 勢 七

一 十 七

後 部

並日 賢 寺 村 字 多 々 姓

翠 山



郵便はかき

魚都市下直道
油中路小川路角

高杉圭介

先生

ある羅房座を
より見たり山々
この石川と大阪に
通ずる街道か
ります
今日ヤマト片附ひま
した急所屏風にか
かつて見たいと思ひ
原一度杉杉を
すりが
の一月月賦金を
井田五郎の
へま
手紙を
郵便を
ましが



大田先生に
内諾を下し
てか小川を
下りて
四月十五日

王子山

郵便はかき



京都市下京区
油小路北詰角

高橋圭介

先生

自公勝手の手紙が京都府
目下で北を失う。怖れ
ゆへかと思ひました。が
今日才一回目の自公金
費しました。おとす集金
郵便法におよび、今
よくならんも、おとすが、今
合凡この手紙を有る、
一番簡明の方法と思
ひますので利用した。決
意、おとすに、おとす、
上小太田先生の方へも
同文同様、おとす、
おとす、おとす、
おとす、おとす、
おとす、おとす、



白
三十五
瀬
平
山

郵便はかき



京都市下京区
油小路七丁目

六角

圭介先生

川漢り野漢りに花月半にたよ
つてお世信をいふりよした
△天雀つ子まきこも 柳・小産九
八何にち月ころ秋りてす
家の中も大部た片片行りま
したるで月内よ赤柿個片
風も運搬の程なしてたが
草花をやりたつてもか少し
残つてつてすのです本月の
上旬柿之橋岡等つのも
け意向も何いたつて思ひ
ますの孝へ置いとるなり



四月二十四日

きかは便郵



京都府下京町

神田区北小町

お礼

三介 先生

五月十日

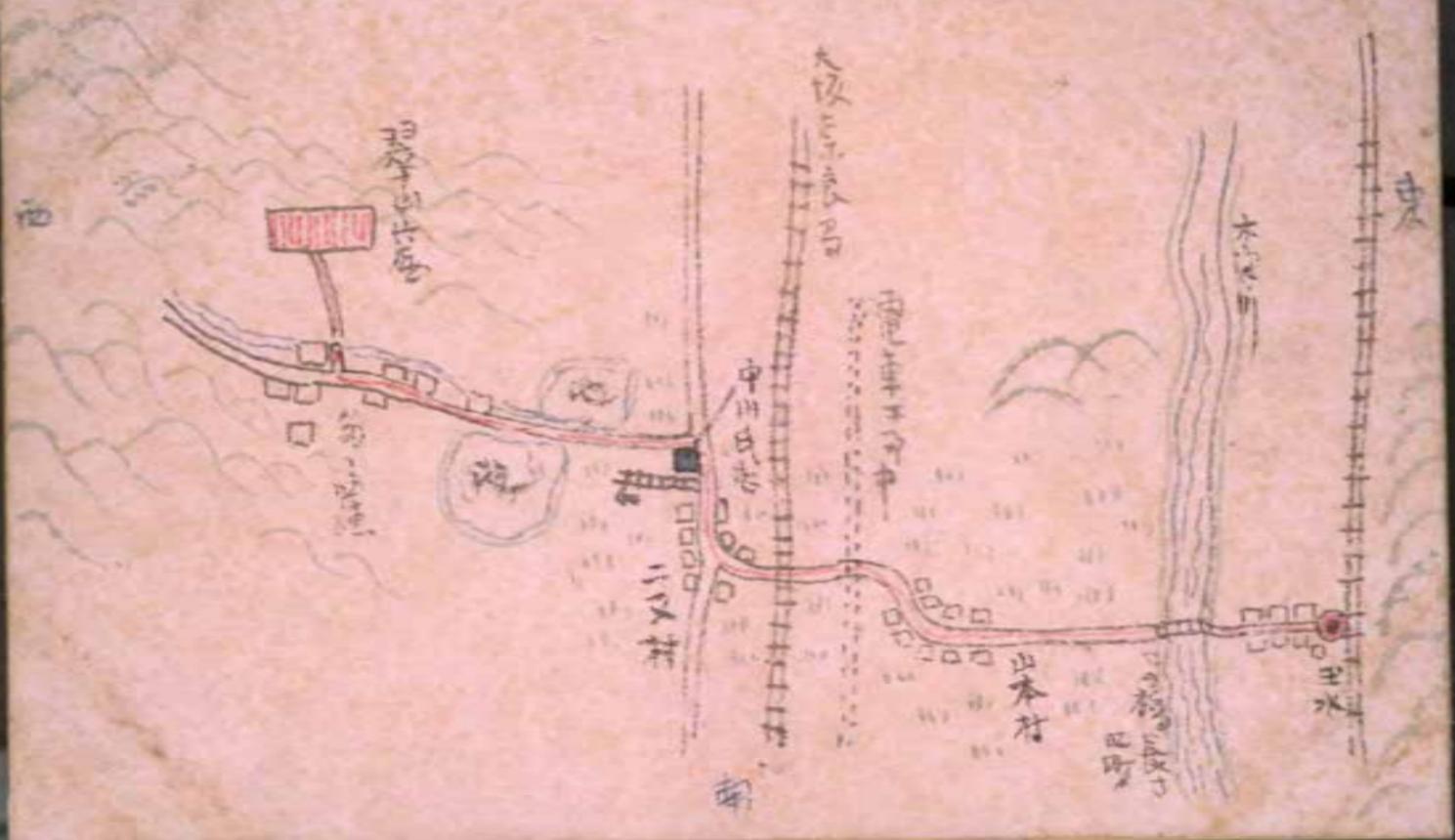
懶野山

極楽寺の御郵まで二通召
極楽寺の御郵まで

の御郵は御礼付の
御郵は御礼付の

御子御に御園と御
御子御に御園と御

北



東

大坂大川

大坂京長司

中川氏家

山本村

主水

大坂

大坂

大坂

南

郵便はかき



京都 市下白丁
油小路水町
高橋三介
先生

野山草の花を失ひ
新緑の春を失ひ
たしかりのヨルキン
ポーケの黄毛の花が
全盛をとりこんだ
中旬迄に目之れ出ル
有向をひんもの
んじまかひ
おるに故障か
腰をぬるや
近いうちに
のる市
たんぼの
進歩消地の上
まじり
かり

五月十九日
風おまじに吹散り上る
氣解りせむ

五月十九日

藤野山

郵便はかき



東京市下京区
油小路北小路角

高橋圭介

先生

山崎のちかたが身山に属
の花園には果木樹が
六七種敷ありとす今
ホーランドと夏島柑が
花成るを都五月の晴
つた葉赤に純白の花
さつりてのすす
いかにも暖国らしいまうい
香と在一帯ににまわ
してはすす小生の好むは
梅もさかんな傳動と
してはすす梅木の志
中すらん梅すす
柳こころいあまのき極く
合身弱くからかしに花
を結ていすす



夏蜜柑花 五月廿九日

乃之四維房

懷素出

きかは便郵



京都下京区油小路
北小路角

藤五介

先生

懐野山毎の釣りと

なげかすて釣ルにやります

一尺に

足りな

いし

瀬で



一寸位のはすといふ川奥が

釣ルまあり今夕は魚のみの大たつ

ものを釣リタ夕月の影を踏んで

かるり、は月見ユキキがづらりと

咲いていそあり燈もかたり也わー



六月

五日



NO.31~40

郵便はかき



京都下町
仲太夫
成永
先生

敬啓

亦からけとと 一箇信を 効能

有が

此の心は 空に 上程し

空の心は 空の心 空の心

地の心は 大地の 野道に

一人の心は 天地の 心持に

愉快に 悔き たり 心持

心持 悔き たり 心持



郵便はかき

東京市下谷区
油小路二丁目
高橋直介
先生

二月十日

田租が初入り前う田かるとい
賑はふ京色となりました

ほととぎす

いよに鳴りまはす





郵便はかき

京都府下京区

油小路北小路角

高井連介

先生

平調子の大梅

少しくたりやうた

所はうつとろしい

事と思ひます

田の面は益稔難

い風趣となりませ

した 虫は少なく

なりませたが蛙とほととぎすは

益もなく音も高めます

夜雨戸を濡りますと水田に

白雨かしくと降りるいび

いませ

果園のなすやまうりは甚この

さうけてよみがへりませたが

草花はあつかりな長かうあ

なりませた 長らく雨をまうてくは

朝の雨あすがほもだめになりませた

五月廿一日





郵便はかき

京都市下京区
油小路
藤圭介
先生

由手紙 行交
本田先生 件
少 乾流 河
眼が一寸あやし
物 巾着 手紙
すかた 分 司 信
あり せんか 一ツ
と 母 さん さん
け たる 公 助 出 成 せ り
した
おの 田 一 夕 郎 水 師
化 し こん ぶ 酢 さん
リ さん さん
夕 夕 夕 夕 夕 夕
夕 夕 夕 夕 夕 夕
夕 夕 夕 夕 夕 夕

この山に立った時は
笑にいと思ひます
人の子の一切は
水子

行々子

山はとてかす

はたしてかす

あふの情は

人を尋でいふか

六月廿七

(5)



郵便はか

京都府下京区
油小路北小路角
所上藤庄
之五

梅雨降り續りしありが来りたヤリ
 出た水湯流早くは釣リ方では
 駄目にナリナリ九のび三四寸系多たらし
 夕方カクとラチヤルルツヤナリとヤリ
 ナすと翌朝ハスに似た 地方いほ
 モツとツム

セハ寸の
 かかりてつま
 す

昔の釣子リ
 の釣はうま
 とつちで

釣の釣目
 ので昨日か
 初れたしすが

釣はまたヤリ
 まさ犬も針
 と印ルとツま

したからとツ
 は釣のしわが
 思ひます

五丁の内ニヤ
 かりヨリ犬から
 コルは釣ルヤ
 河筋と思ハルマ
 △



早朝
 上カに行
 く釣は
 又別報
 の糸し
 かりと
 す

四五寸
 もつけ
 ら面白
 からくと
 思ひ

今
 釣糸を急
 造してツ
 す

七月二日

郵便はかき



東京市下町
申中街北中橋

高橋善介

先生

なかに江戸釣も、漢になり
申した。昨朝二百目位の鰻
を一尾上げた。モウモカ
らうたうなり。た土地には
ドク口とつぶ、外ボハゼの一種
この奥をけはかり。ま
ニルも、最初の上にはゆきま
せ釣道にむす。ますと、大川
は七月より、山の巾は七月に
入つては、針にはこたうた。も
しひす。只、多きが釣れるの
には、おにします。
永びおまの釣も、終りを生に
かます。ニルからは、自身を、大川
で、勉強が、あま、る。事、と思ひ
ます。



六月
八日
下
カ
ロ



郵便便

真都市下宿
油小路北小路角

齋藤

美介先生

連日三十二度を下らざるの暑日
所々暑く申候なり。と申すや、
主として、
当方の直射の中は、まじしいですが、
衣の内は暑さしを、
田舎の情景、人物に面白い
取巻が得られるよ、
リ所り、
日、
君へは、
小景は、
あんなのと、
すんか、
から、
すんか



七月十三日
三猿屋
山



郵便便か

京都市下直正

油小路北小路

角

高杉建介

先生

此書送の葉は今

柳文ありは社中

目しゆ大分ありが

見りた

河原上出たあや

登る上りあや

ま有り礼

此



六月二十一日朝
鹿一偶



郵便便

白下市

下谷区神田路六丁目

高橋泰平 先生

七月廿一日 西丸相

目着中 行々 見ゆ 中
東京の所 敵 昨日 漸く 退散 あり
から 司 由う かな 相成 小





郵便はか

京都市下京区
油小路北小路角
高橋主三
先生

一昨日より山村の所を
と迎へて来た

橋の袂に砂を扱ひ
線香を立ててあり

あふ柳へ火をうけと思
ひますか

思ひますか
中々面白い

坊やえが村の子供も
に在りて家々を廻る

いまあり
カルカラーがよく現

中水といは
もの

もの



八月十五日

NO.41~50

郵便便



高都 市下高邑
沖中 路火十町角

高田 兼吉 先生

朝夕ハ急に秋らしくなりえた

八月廿四日

百十音が高音を張り出—まいた

コーロギも中調子を出し—まいた

赤トンボ 野萩 只て秋の情

曇となり—ました

気分は何とあり

澄さぬまよ—

すが 漂浪の

負画師

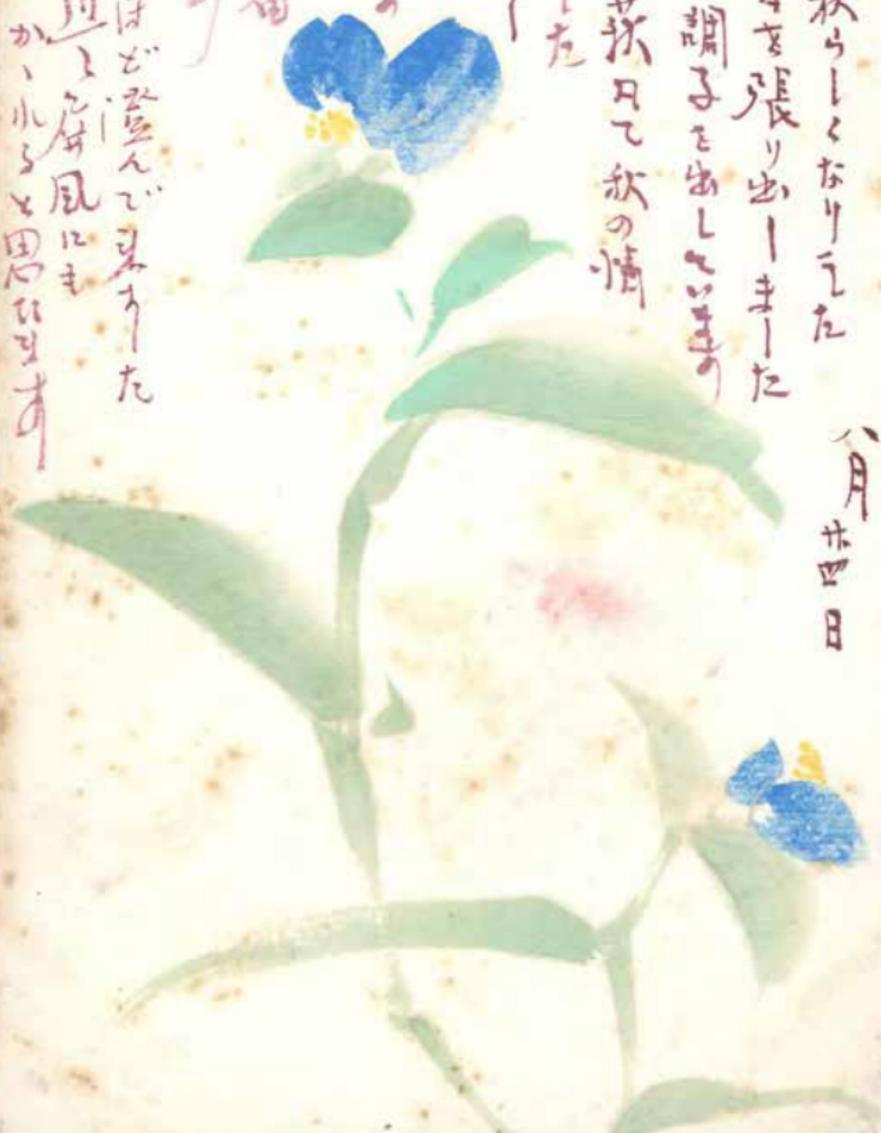
は 亦は一番

游の冊のあり

空気もよほど澄んで見えた

赤い魚と風にも

か、水と思ひます



郵便はかき



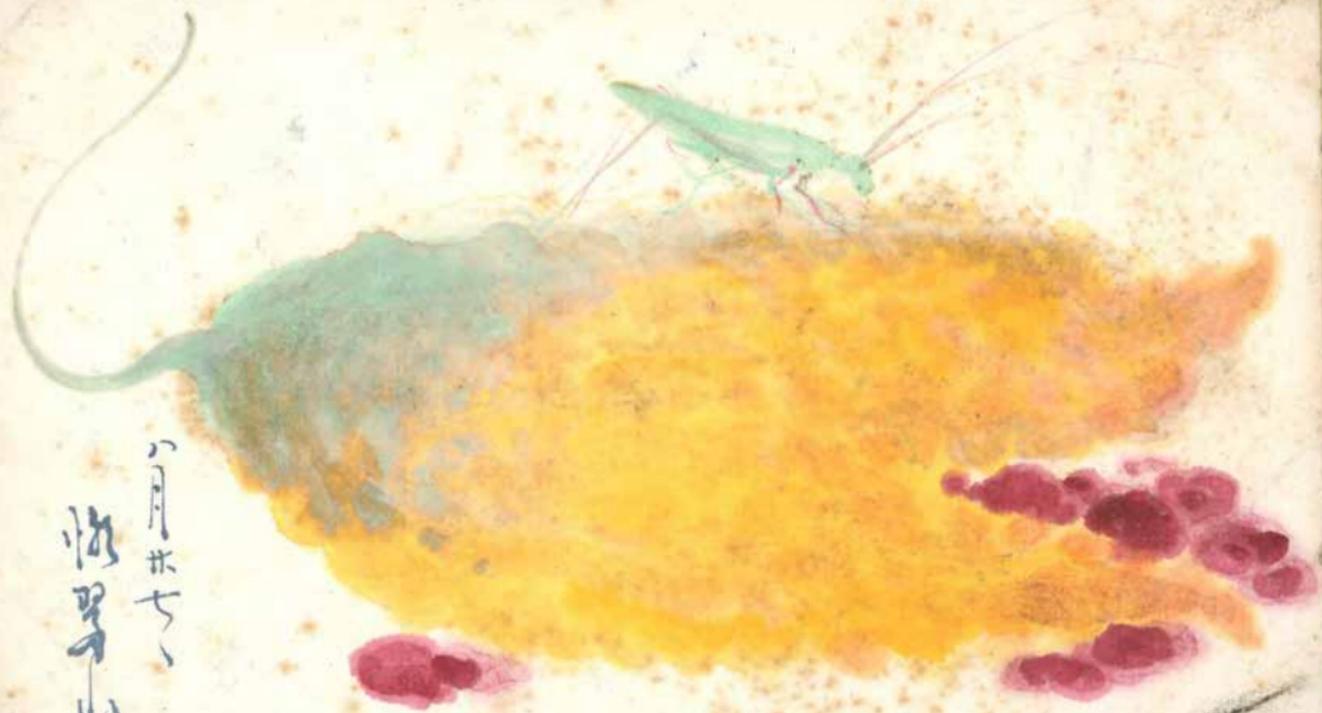
京都市下京区
油小路北十番

高橋正幸

先生

角

ちよりー 他出つたー 大
はまなまら道二方依
張つちー こまらこまら
ちよして左らー くら
天失能ららら
ふらららららららら



八月廿七日
静翠山



郵便はかき

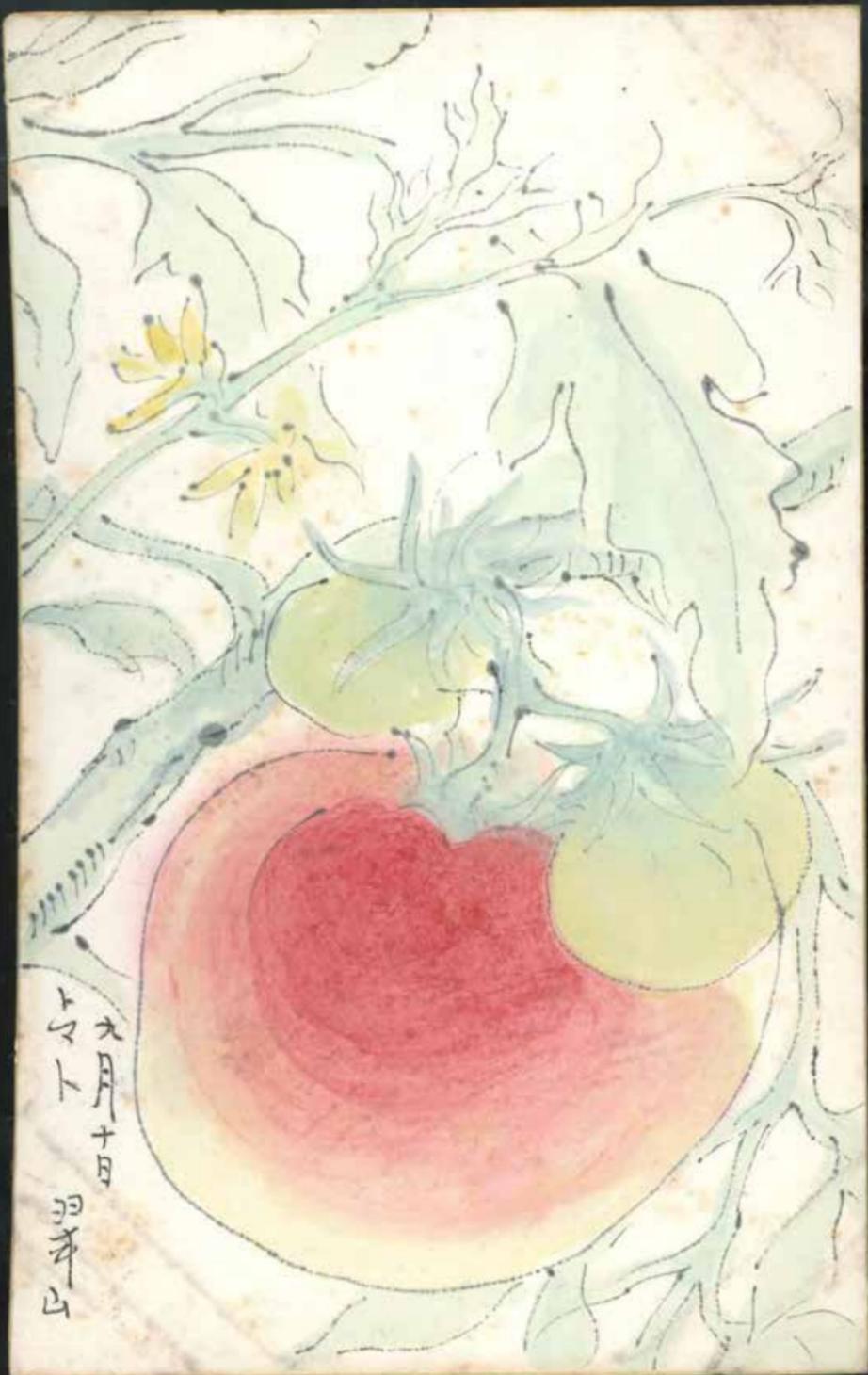


東京市下
油小路
油小路

高橋圭介

先生

日園の佳味を以て
評判のよかつたトマトと
秋風とせに潤いの
旨味をひき
澄んでま月空に赤蜻蛉が
羽ひおしました
箱も大きく取りまゝ
背戸の山に朝、五時の雀が
後つてまゝ
去年、米九時のよ、ふ
情景に丸こは以て
た



トマト
九月十日

羽幸山

郵便はかき



京都市下京区
油小路北中町角

二向孫主付

先生

夏は生れた頬白が
丘の上畑の畦に夕、
夕、と啼きまよす
野菊がはつきり
秋を思はせませす
柿の実が色づき、
初めきりた
夕空の青くすんだ
さびしさ この秋は
馬鹿にさびしい
人と語るは尚更
わびしい
合てこの秋は馬鹿に
さびしい



九月十七日

若頬白鳥

若原

郵便はかき



京都市下京区
油小路北小路角

高橋孫五郎

先生

思ひぬに



大月二十日 日暮山

思ひぬに



郵便はがき



高橋直介

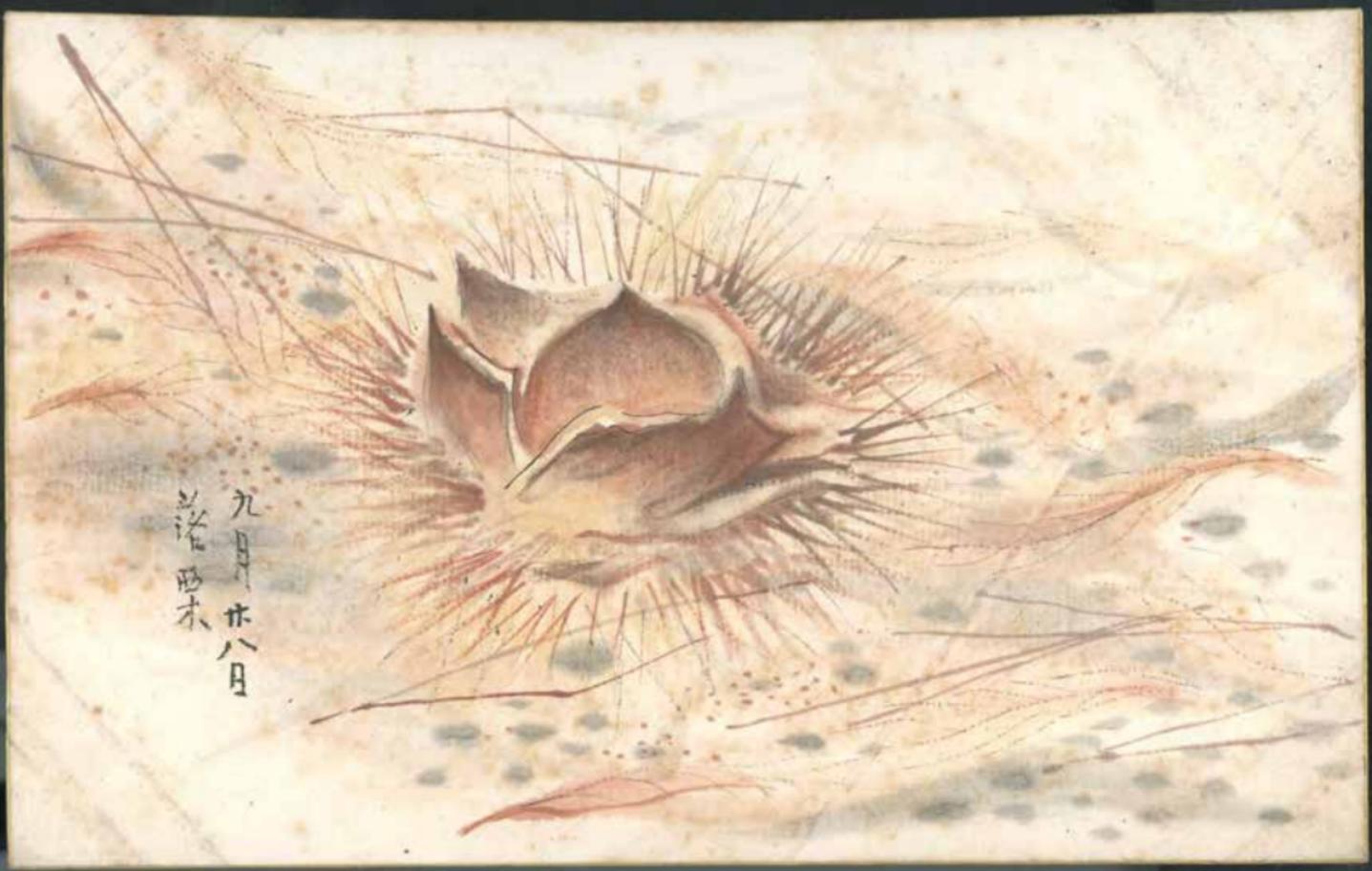
先生

京都府下邑
沖津路某氏宛

灼熱之餘、暑月俄に冷却
一朝にして肌寒を覺へ小
所障りも所産あり、又
亦では俄に多忙過ぎ
中因りの事と存せし
今度は時候も安定
したよりすに由り
本月十日頃まで俄に
屏風を頂戴にせしり小
多刀由生、乗上の心算花に
小わが、弟と一、句、動
車だけき、弟らせりか
子許小、不忠なり

高橋直介

九月廿八日
兰渚西木



郵便はかき



京都府下京邑
油小路北小路角
高橋圭介
先生

大
気澄み渡り

あ山の眺めはつきり

して東より

時に犬吠の馳り及豆の玉

はつきりしよ

早稲日既に充分に実り

赤く穂さ垂れつゝ

つばめ常に高く飛んで

いま

今日午後一時木枯

に似た空の風が吹き

まゝた先し直ぐ

お湯かくなりました

夏あまり見なかつた虹

が不思議にも秋の比

次に時々物ま



十月五日



郵便便か
13 OCT 1911

高橋 達行
先生

東京市本町二丁目
油小路北詰角

十月十日 懶翠牛山

懶翠牛山は懶翠牛山であらう出ず

にありたり 茲四十五日は

絶好の梅も期所ぞ

すがとくも出

不性で因りよ

あり 頼人を田力



もニエ^可あぢやふいと都合が悪いとの事ぞ

又少し何とかが魚まゝが何事かあー！とぞ

巾着少しあつたおす

お懐中おす

巾あつたおす

雲雀ま春とまたお

さへおりおしよ

した

もくせいしまりに

芳香を送りおす





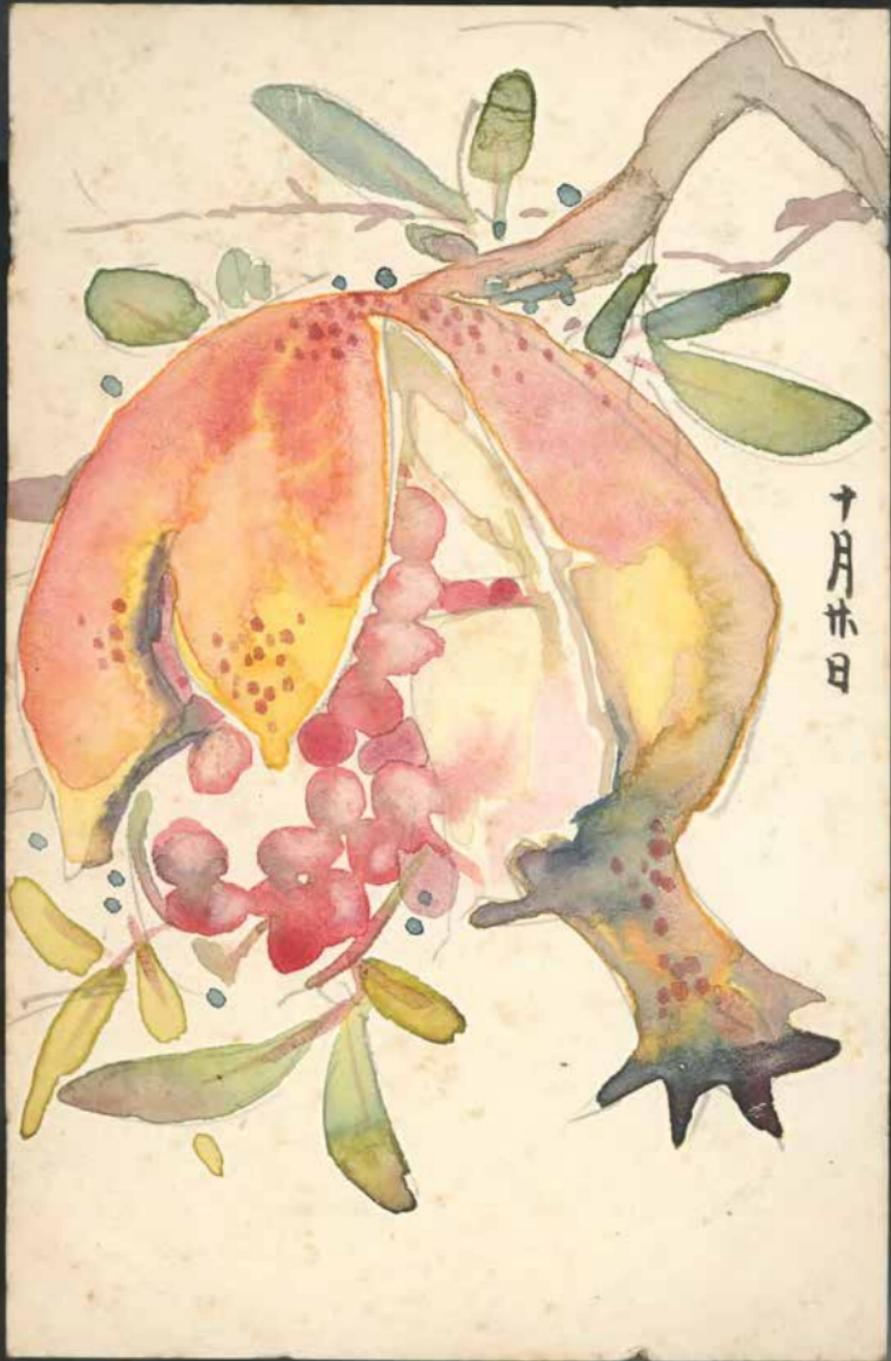
郵便はかき

京都市下高尾
沖中河七少河舟

高尾主介

之之

叔障ばかり出来
出京一日血がに
まつて少しいら
しつます
気候が絶好です
今月内にはい
も次蔵にりり
いと男へこつ
収園のから
あししました
山にちらく
栗を雑へて
有



十月十日



郵便はかき

京都市下京

区油小路北詰

有

高橋正一

之丞

笑予の屏風箱小し繩

水の跡が虫足たつ

中身は昔の政障ふくり

片歩を意を

動橋ちまりはゆしく十生

心身は板か砂日は一日模

物し本日廿二平常に傳

これまゆめ意を

山野全く秋にきり

庭の山茶花しほり

瀬翠山

小嘆



十月廿一日

NO.51~60

郵便はかき



京都市油小路
北小路角

高橋圭介

先生

去る四日の夜から大典八中
自出度の餘波でございふ
事か初めらんまりぬ
次回深山香箱はナセりの
夜がソーソい
柏子木と太鼓に様ネリ
あぶなつを今日の下は
かりとえんにしていふあふど
大した夜警言であ
時に田塚の賛詞など
又うれしいものありま
オ



十一月廿四日

瀨野亭

夜夢圖



郵便は

白河市
下町
油小路
北小路角

高橋圭介

先生

昔ながらの山野を忍せり
我膽の花 昔取中に
いとまつ、ま、刀かに
笑つてのまあ

しはらく、びの中、忘れこいた
電車の走る音が
田舎の空気がとて六七町
劇はあれた山 服へはく
すえます

夕方山裾の草上に次ら
ばいながら、こころいふ、
の草花をき見ていませす
をびえていつと、にも思ひ
あふれ、元々のまに
ありませす



十一月
山

郵便はき



京都市下京巳
油小路北小路角

齋藤重介

先生

買ふ年か餘程をつかしの
とつふ紀人志画かかキ
川刺交多泔止
一度見物したつとも思ふ
のつすが恐ろしいよ
気もしまふ
然し冬強り光けも
且之非見物したつと思
つていまあり
遠雷のめ、礼砲にて
はるかた都の暮り祝
さ藤想心してやあり



田舎の
奉祝賑ひ

十月
十四日

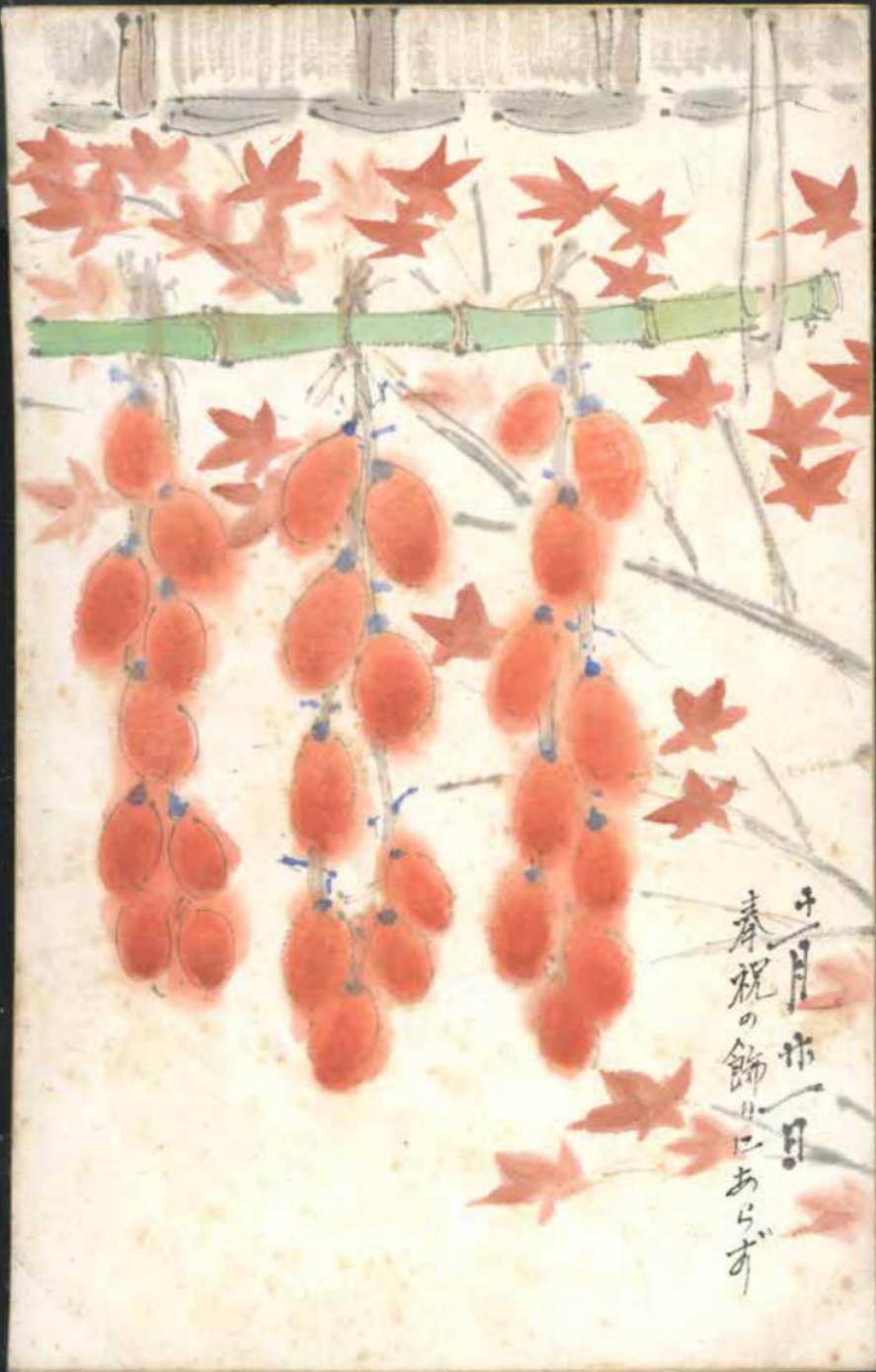
郵便はかき



京都市下京区
油小路北小路角

藤圭介
先生

先生所存の山柿鶴の子の
つよし子に市国を思ひ出しませんか
赤味より小に黒んだ位の生乾
は町の精養小左上菓菓子
以上美味しい味のあるものには
一寸敬鳴きます
自然に下自然の恵みがあるも
つです
産房の南縁につまして置き
ますと黒くなるのを待つるも
なく 一房位直ぐなります
ころふ喰べ方は殊に美味しい
のだからと思ひます



十二月廿一日
春祝の飾りにあらず



郵便はかき

白の都市下意已
油小路北山

高橋

幸心先生

この頃になり 田舎も奉迎
 踊り合ふ たいよみ初り
 夜半 家あき、野中を
 提灯の 灯がちらほら
 トコトコくと太鼓の音
 が 淋し 返ります
 山の 腹 立木にかくれ
 自今 村々へ 帰ります
 気の 主母あかしの 音
 私 狐火を 見よ
 念持で 空から
 ながめて います



郵便はき



京都府下京区
油小路北町

高橋圭介

先生

中より過はくま詠しよす
 終電に近ハ 周崎に送
 曉の枕頭に獅子の咆哮あり
 フリカウ 野にありて
 了る 蓋まで
 誓ふ
 めざめり



昨夜ねづかのめく、光こ
 し世平に城山景に
 仰り来りた
 子内空輝きまじ
 ありけ解き
 甲おこしす

十
 十二日

折山

郵便はき



京都市小倉町
沖中區北小路角

高橋

三介先生

今朝の冬かやつて

暑かりた

今朝初め

手洗ひに薄氷を

見せりた

田甫も

あけりかけあふく

淋しい情景と

ありました



十二月十七日



郵便便

京都市下京区
油小路北々路角

高橋孫吉
先生

大曾ふ承り送
意に預り一々様
交
毎度あからし礼の
申上りもアリま
せし身にも有
しまお
田舎ではもつたいた
い柄のりか早速正
月の晴着とし而平
志を込め申しと
又や生好物の納豆
御山承り又お
中礼申上ります

何の事で賞へて来ますか
 をやの登止後と踊を上手にやります
 嬉しい時は一人でさつとやります

ヨカゲ

ドリ

リッパ

ヨイト

コリマ

サツ

何の事

だかさつぱり

解りません

正月には長い袖の着物を
 を着て踊るのだといつて



馬鹿に気遣
 嫌
 の態で

十二月

赤五日

翠平山

きかは便郵



京都市 下京区

油小路北小路角

高橋 三介

先生

東ではあまり見ませんが
 今月城南邸トノ日でした
 三時頃からバクといふ五月
 が方々かううへてまゝす
 子供のまゝは五月や笑聲
 四時頃トウ村から起す
 ました
 爆竹のあかり方で一年の福
 の因縁を判じるのたゞまであ
 この火を竹の先に移しては家
 の十五日の煮まのまじ一切
 の因縁を断つる種々の事を
 やりませう 先生にはさ
 不申すも 全作うら
 田舎の正月らしい気分
 が面白く見ふ小ま



二月十五日
爆竹火

京都一市下上京区
油小路北カ段角

郵便

高橋主介

先生



頃日來の安きまでおつかり

まのつてしまひました 孟信

も怠り勝手な所見も怠り勝手

ち何れか申す譯のたより事

ばかり 暹日太田先生から

好物種々頂戴甚だ念猶

していまおきあすの計ありは

宜き言ははるる申す

惟勤者しく一度出来し方の

すか神徳を布でまつていま

この方生念には多條多く安心

できが動けなく自由で弱つて

います

年禄の災のぬくゆ産寸尺に狭つ

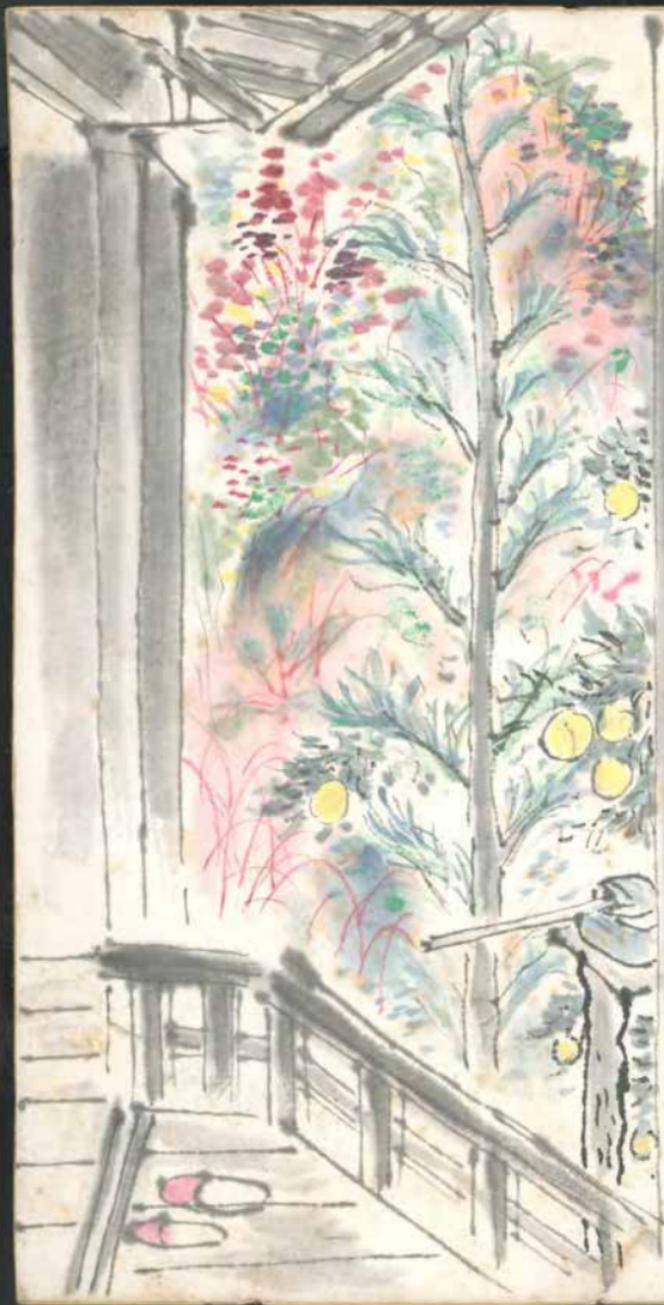
てつよすのひか自の手洗 椽の

端まで さとが此ます

一月末禁煙の準備をなす煙を

めまいを一日刻十分

つらい事であ



東禄北窓

二
一
日

NO.61~70



郵便はかき

京都市油小路
北下路角

下りる

高橋主人

先生

非常な無休休しました
 降りもありよせんか
 成日月がこいれこの神徑角
 七併發永りる悩みの分不
 出外先にはさる事が出永
 よせんでしたか
 春風一時に到りすつかり
 舞りました もう大丈夫で
 今日休 東山へ畑へ出て見ま
 した がんが 草 そろく
 花の仕度としてまナリ
 土着が出るとも もう間か
 いでしよ

二月廿三日
漱山



郵便はかき



存
イホケン
祭



高尾
美
可
柳

市
内
沖
小
路
此
上
路
角

一不似右より中六未だ死せず



河豚鍋の下戸も一盞の怪笑見
春の雪と血にもうこの鰻鮓

河豚汁と春はあせふの坂はかど
鮓汁の膚をあらうや丁太の雪

及ゆりぬ

世より生

郵便はかき



京都市下京区
油小路北詰角

六角田原正五郎

先生

昨春の様に
稲々園南庭に
丘々と若草色を
持ちました
春風は香気
を送るも
るもなから
と思ひます
春日のありまし
たか
春らしい
暖かさ
が
牛車
の
輪
の
ま
し
り
ん
ぶ
り
と
助
か
り
ま
す
か
い
ま
す



三月
廿九日

郵便はき



高橋 圭介先生

高橋 市油 宛
下りあはせ

よほど

春めきあつたが、成る程、
はやだ、大分流れて、
中降りも、ありませんか、
衣内と、小供は、未だ、あつ
かりし、まじか、
中降り、で、ええ、
し、
昨日、一千と、
天王の社へ、
貝、
よ、
穀、
の、
い、



郵便便か



京都市下京区

油小路北七路し角

高橋圭介先生

三月二十一日

梅の三分通り

紅梅の今更満つ井で

ありませぬ

三月廿日

一輪三輪

三十五六日頃

見頃をそそびす



ふからば一気には百花

咲き香ふでしよこり

外月白々には

山つゝじ

結んで純白の木子が

出るに聊自遣に

山は梅よりま

こいを待つて

いませぬ

郵便はかき



六ふ林

圭介先生

高橋市
油十郎北五郎

一今年ルウを何にしようとした
よしよふを林で何と
申やりありませぬ
毎々生氣を失ふのむす
かふしよの或は日月のヒ
ツツコイにはおはしまし
頭腦がボヤケテ或は又
性があやまり 楽から
昔からが空と漠と
小生を性になりし
山も野も今こそ春は
甜月を人も日取れ
激のあひが

四月廿九日

笑日の白き花は遠くはかきとるに
中田早の並木林の夕ウチか
とれとるすすれは
つはあつたと思ひます
今一ツは
定は申分のるり北

花井物元民の
思ひあして
あつかい
しませたか





郵便はかき



直ぐ
七都市
油小路
北の路角

高松 藤吉

文也

この頃、竹をすてゝ肉にす
かひをす。土壇の蒲英公は
白の雲を飛脚していまあり
田川の根にきんぼーが
が乱れ咲いていまあり
茶園が一時に初まつて
城南らしい情景が濃くあ
りまゝ。五月以来、病気が
に見えぬ。雨はたつたのであ
り。小供の麻疹を最良に
一節、白くさうじやう緑が切
れそつてあり

三月廿一日 四時 巳





郵便はかき



高の坂

介先生

京都市油
小路北の角

黄ちい月の日外る待暮

河をよのそち(園)うくり五人十人の都が

一勢に帰り路をかかりませす

(但し半月寺の(元)也)

紺餅に赤たすき、白午棧

新緑の蔭月を背景として

馬鹿に調子のいいものあり

月と音子が思ひ出したよりに

ボウくと咲きます 桐の花が

高く強烈な芳香を送つてませす

河をよかび都がながりませす

永の魚躁うら振り出て箱落ち

つよさをとり産しませす



五月二十九日

きかは便郵



高都市
油小路
角

高橋 圭介

とと

葦園の葦が取り柿味
こふらうらは二番が初
あるのたそしむあり
桐の花も野つゆら
しよつにありやうた
見見子のこゝと日
顔に笑つていひあり
苗代の苗も四五寸に
びやうた
夕方うらなさがしよつに
花の交ひあり

六月
十日



郵便はかき



京都市
北小路
油小路

高橋圭介

先生

麦刈ナルを得つ
ぬい色つき、
かたふいていまあ
赤おのの花か
畑一面に紅白
の小粒をつけて
いまあ 雲雀
なままあ



二月
十日

NO.71~80

きかは便郵

高橋市油小路
北小路角

高橋圭介

先生



ニ三日のうてと、いつせいに
田植が初まりました
つすは湖のめぐり
店方は、はなはだの、お返し
ありませう

殊々、お返し

蛙しきりにあつた、

まあ

六月廿二日



きかは便郵



向一都市
油路

言からぬ

主介之先

梅るふるを暑さ軟にかへ
り左田植時に雨のな
のは田不家も空や困る
中てしよりが見るゆ
情景が薄いようです
一雨欲しいものであ

街道がキラキラ光り
真夏の夕暮がしまあ
日暮倉うらは由農村の
はをだやかな気合れを
が身まあり強忍ふ人
な人もいかに平和に
に見えへまあり
やかてへちまやひよ
さら下さのも馬道で



きかは便郵



東京市油小路

北山鯉角

高橋甚五郎

先生

貴札を鴨子四日までに
送りました

ゆ菓子をせがむもの
ですから、流石の様

白娘もかしへたわいて

いよいよ

どういふ風に教之月

すうのか見当が

つよいびせん



七月十日

每三四鐘方

郵便はか



直都市油
角

ありぬ

まきり
えん

あは城ヶ家と
いふ金魚地一帯に
殆んど枯てられ
てありふ巴且杏
畑があまりあり
ここの花は可成見
るおもものぞいたが
實も中には枯て難
い趣あり
早朝散赤、四ウ五
ウつまみ喰ふには
もつてこいであ



巴早香
七月

十九日

きかは便郵



京都市由
米野
野原
野原

こころは、割金の上涼しい
夏だが、向の暑さは
教人的のものとか、ま
した、同、称、障りも
申座、と、心、び、す、か
た、ふ、い、へ、行、て、見、ま、り、た
下、この、座、の、子、供、が
今、大、表、面、白、い、と、思、ひ
ま、し、た
我、と、言、う、ら、も、中、々、暑、さ
い、ま、あ、い、あ



きかは便郵



京都市油小路

北小段角

高藤重介

先生

子所の鳥は

眼の緑が

白くない

といふ中

を知ら

まうら



八月十三日

薄草白

後山散家の頭上は

小さいものが三四に長いま

す。二三に長はあからま

くちりやうふが

一に長かけおらこ歸り

かぬ目白の雛であ

うま
餌たつりば

よいと思ひます

きかは便郵

京都市神楽坂栄路
角

高橋直介
先生



日

清涼の気がまあるん
有毎子馬追が收帳のまありを治ん
心付まらしん

くん

八月二十九日



郵便はかき



京都市油小路

北小路角

藤生 圭介

先生

朝の耕は怠り

がちでありか夕の

釣は飲かあ

はまらである

今年は日照り

小川に流小た

魚影 殆どあり

芝 駈ル左川

沿ひを歩くと

水が心を美良

花の世の中



九月
六日

虫の音
楽
し
ヨ
リ
で
あ
ら
ま
り
て
い
る
十
生
も
思
ひ
が
あ
ら
ま
る
し
ば
で
あ
ら
ま
る

急事
乳上
田送



一の某國に息慢のお
迎所が収穫の満ち
町介子ボツクく出来
ます

我をさるぶといふ意大
念に其をりしてゐる
やぢやありませんか

う学生の自分生と同
く観る予が出来るは
心慢の得でしよりの？

夜月澄み渡り

その鳴音又しきり

秋庭ながら獨り秋
を写く予夜を更ふ
しました

藥劑師

京都小川通御池南
齋藤仙也藥室
電話二四二番
口座三七一九番

明治

年 月 日

NO.

外用法

劑

殿

藥劑師 齋藤仙也 印

京都市注小路
北小路南

高橋圭介

先生

小生の菜園は怠慢のお
隣近所が収穫の満ち
た時介子ボツク〜出来ぬ
束ます
自然をみるぶといふ意大志
信念念に其基にしている
譯がやありませんが
全く先生の自然生と同
しく観る事が出来るは
怠慢又の得でしよりの？
昨夜月澄み入り
虫の鳴き音又しきり
我度ながら獨り秋意
を写る事夜を更ふ
しました



九月十五日

きかは便郵

京都市油小路
路北十路角

高橋圭介

先生



迹子の袖々袂引つ懸かつたり
 婦め子の影交や向ふ可ねをひかけたり
 茸狩には禁物である内藤さつ
 猿取せ次 東京では大福餅を
 包む甘党は所知の甘味つは
 ばつかついはらう ともいふよりです
 秋も末か木枯しの冬ともなうとん
 真紅といつても 云ひきれぬ程
 紅くなる空の色
 その上を粧ふ如く胡粉をつけ
 あり調子
 それもいには佳いでしよすが
 先生は今のこの色の調子が非
 常に奇きであります



十月二日

翠山

NO.81~90



きかは便郵



東京市
油小路北小路

高橋圭介

先生

五月五日

東京市

十月五日

泉山の栗葉拾ひ集め山の趣を
のびせ
する

意
味
ど

ほんの
小々

中送りの
わづらひ

拾ひ集めた
と申しま

オと

きたないも

ののぶしにも

歳がらますますが

後山栗ハ其味

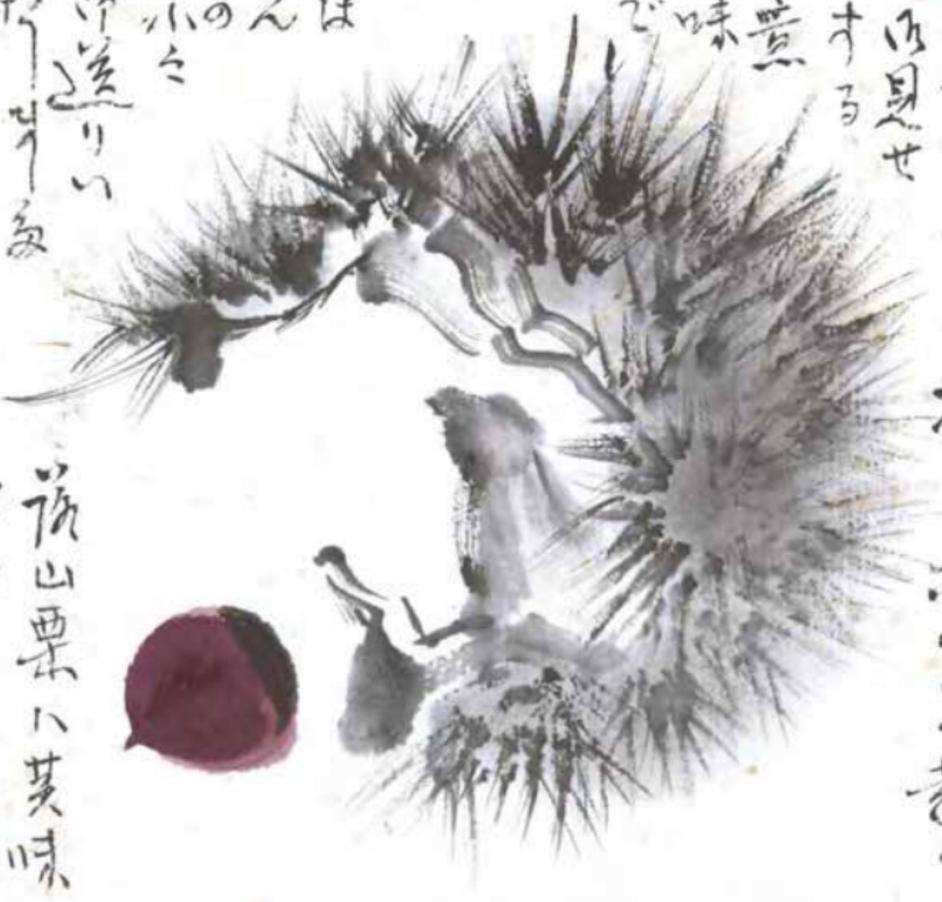
栗中の最な

るものだと

すまじや

ので

山



郵便はかき



直都市室河二条

南大田中病院

高橋圭介

先生

少所色々愁懐して
ましが一寸のちがつか
ませ

直所の近自道と云思ひ
ますかより思ふかゆきを
祈りまあり

夜も月明気澄み
火さくして畦の小徑を行
くは困りませ

月にそわれらるといふ柄で
もありませしがいついふら
くと村の夜道を

出づまあり



十月二十三日
翠華山
多羅入口

郵便はかき



京都市定所

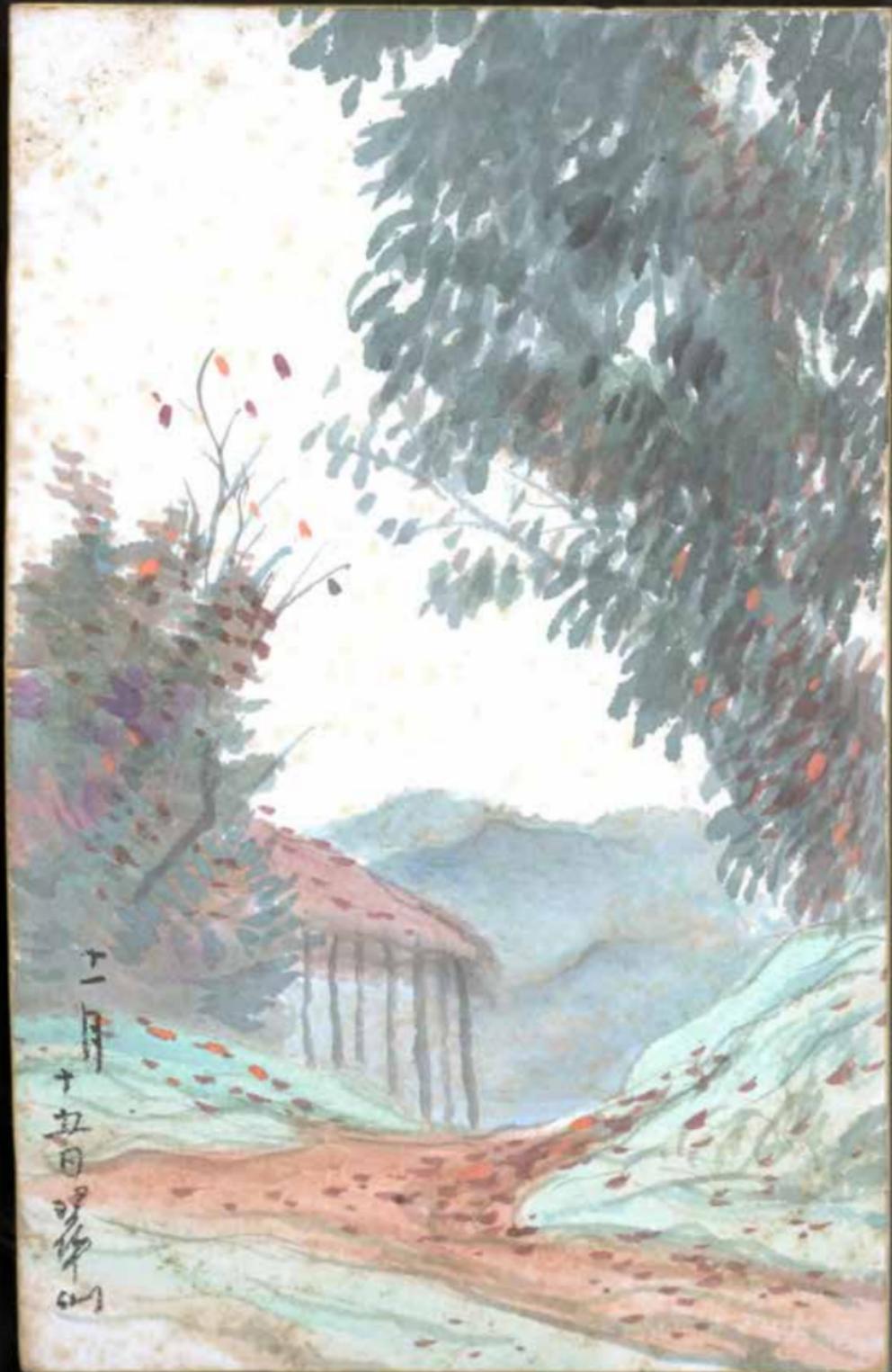
二条市下

田中病院内

六の森圭介

先生

又々急慢多謝
稿は半分とりナルラ
ルツコアリ歌
大い紅茶が畦道子
目立ちます稲をら
に百千口が響りよ
山には柳紅葉 甲子雀
山雀 鶯エビ渡り
来ヨアツル比ある
リ秋の早取中では
門前の細道



二月
十日
明作

郵便はかき



京都府京町
二条東南
田中病院内
森圭介
先生

つぎの田はすつ
かり刈り及ぶ
草も多
木も江戸
したか松林
がま月と母立
ちまふ
下り
まりに音つ
まふ





郵便便はか

京都市室所
二条南入
田中病院内
高孫直介
先生

故障やら病元やらその
内へ師走になつてしまひ
すつかり申上信をさへつた
しまひ申し候

申上つたは申す可

秋のうつり替りり知せした
つたも御山有つた候はずが
いつら弓にかゝるの山里にな
つてしまひ申し候

東名山のくのぎ林と四十雀

山雀ハ雀あど朝と夕に

渡り来てはコンクカラクと

あやまき矢の山の立目せ
立ててお



十二月十七日

後山小景

郵便便



京都市上ノ京
宝町ニ下南大
田中病院由

高橋直介
之五

世の中は大分あ
わたりしくなつてい
るようだが山村
はその如く阿の麦
化もありませぬ
山は木を川には
大根を洗つていな
あ



大板あらし
十二月廿五日

郵便はき



白部町中室町

二本木南大

田中 病隠内

高橋 圭介

先生

如揚々環味所送所
 志懐く感謝しませ 早速
 詩合しさし〜貴ひまいたが流
 石子若狭まのは品格がちが
 いませ 田舎ではめつた子口
 に出来ませぬもの 一入り美
 味しく〜さいます〜
 今令やは秋の永雨で昔も柿
 もあつかりやりそくなつ何
 も甲目にかける事が出出来ま
 せ〜でした
 一昨取来の雪玉、さ〜く積り
 ました神強布が怖くて山を
 歩かまつたのは多〜うでした

十二月
三十日

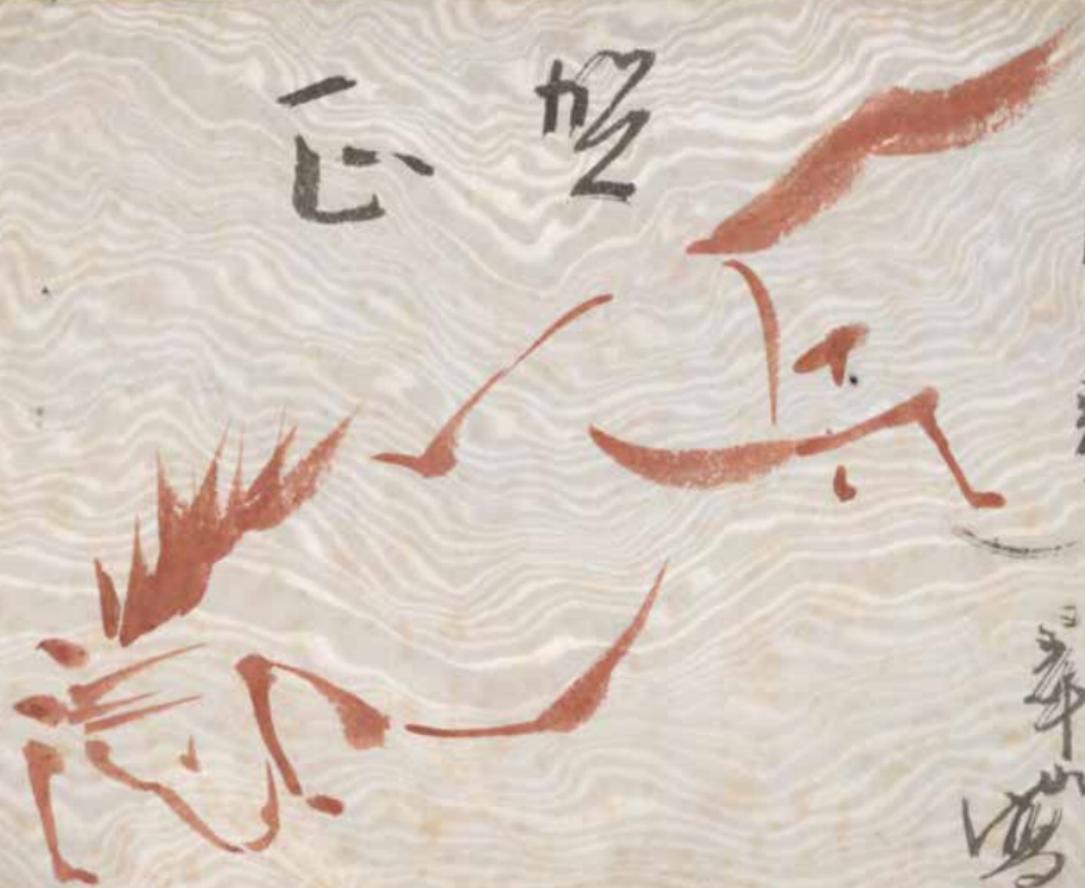


郵便はかき



高松市定町二条南大
田中病院
高松市定町二条南大

正 加



庚子刻

年



郵便はか

東京市定所
二条南入
田中病院内
高橋圭子

先生

朝陽よりさかた
誠たよき之を
迎へました

新生の小詞へ
四十元の所人が
つるかつての詣り
をす子染硝子越
しにあかめまよと
物詠りの目つて
あるよすです

昭和五年

一月二日 翠華山 坊



きかは便郵



京都市宝所

二条南十

田中病後

二の森連

内
之生

つまらぬ徒らや初

め出し毛子に惹

かつてつましぬのび

すつかり忌幅又

この罪輕からかど

怎縮していまあ

春立ちから寝んさ

汗之返りふんえ

上つていまあ後

園の梅のみは去年
に増して之れ采四
分廻り咲き
香りあり

11 月

廿四



NO.91~97

郵便便か



京都市空町二条南入

田中病院内

吉原 主人 先生

二月廿五日

春光さくらか 春日まことに

のちびすの生のやかりるを

永でやつと蘇りまゝ

山路日取塔を

あつてつま

日溜りにはたんぼい

も笑つていま

雪が春渡りをやつて

いま

頭に席斑のもの足下に

この蝶かゝひい出

おーと



郵便はかき



京都市室町三丁目
南田中病院
有海先生



三月六日

雨水取が雨まつてか
やはり空をさがり
あーた

出かかつてりた草花
も引つて人およろ
気がしよす



小生も又立門子をきて印
あーたごも土字まは出た見
えます小供が毎日

摘取つて

来ます

郵便はかき



京都市室町

二条南大

田中病院内

室町

先生

春日といへぬ字さき續見よ、
野良も未だ作気まはる

しませし

南日向陽の庭に

は村の老人がやがて使

は教ふありぬのむしと

いひかたの年大い

さしてつまず

殊紅梅一ニ輪 咲

つていおち

三月

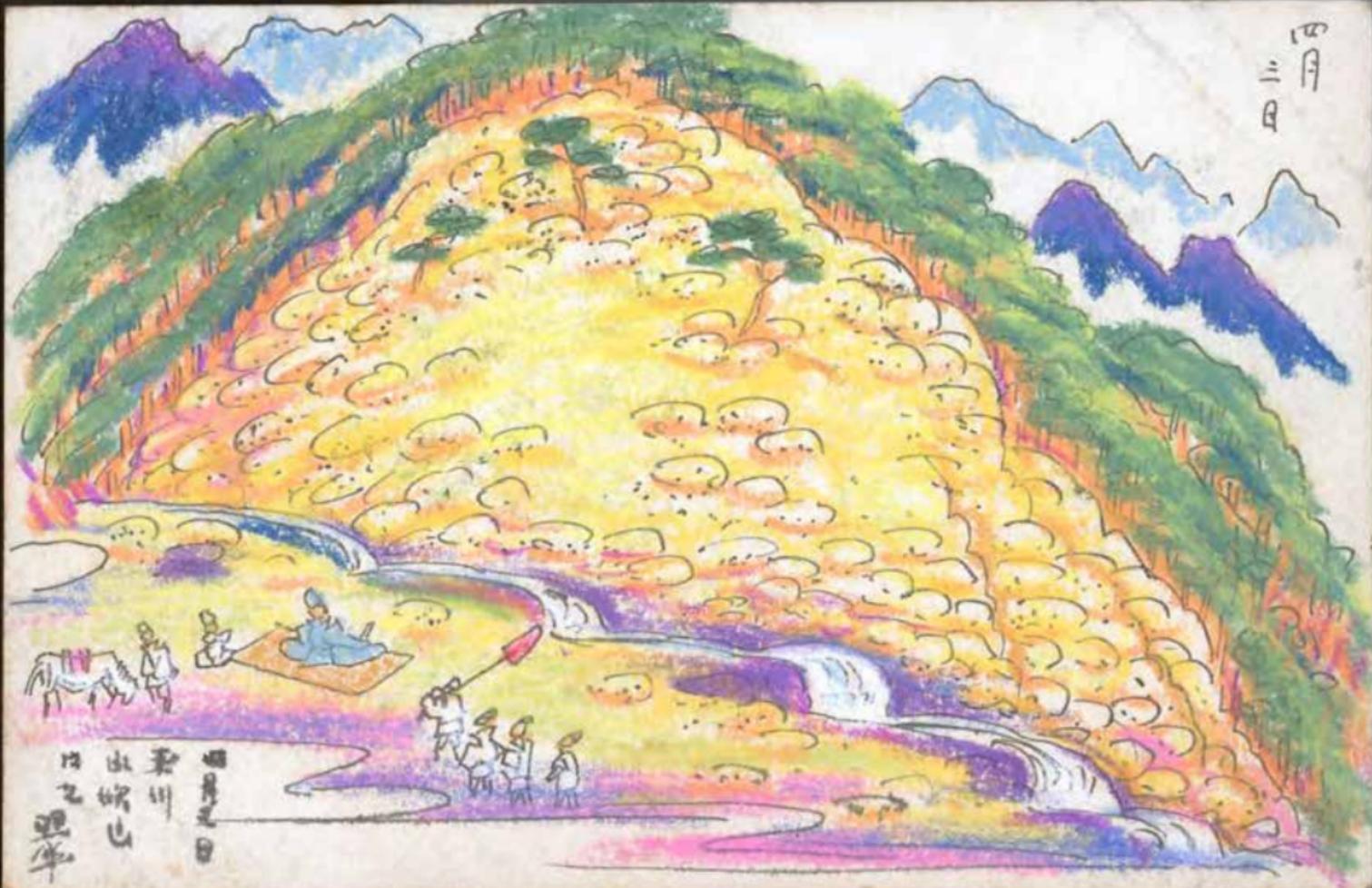
十七日



三月廿一日
思軒



四月
三日



山
川
之
景
也
畫
畢



きかは便郵

京都
南大
室
所
二
条

田中
病
後
雨

兼
吉
介

先生

新緑 午後から
小雨 緑 稍濃く
茶園 新粧
ほと、キ、イ、す、う
初立日とさうま、川
萩 毎田川、子
蛙 鳴有之、川



西
月
水
月
年

きかは便郵



高橋市定之町二

茶木南

田中病没

庄圭介

芝生

この一日可ら

茶橋一齋

に始めよーた

亦降れは耐ル

はととよ、すを

ソオ、おち

妻の穂高く

萩と蛙鳴ラ

しきりびあ



五月
八日
翠竹